

Written by Sarah Besky

The Darjeeling distinction: Labor and justice on fair-trade tea plantations in India

(University of California Press, 2013, 264pages, £29.95, ISBN 9780520277397(paperback))

張 威
Wei ZHANG

現代社会において「社会正義」とは、いったい何を意味するのか。本書で、著者の人類学者サラ・ベスキー (Sarah Besky) は、インドとネパールとの国境にあるダージリン地域での31カ月に及ぶフィールドワークに基づいて、その問いに答えようとする。著者は、ダージリンの紅茶プランテーションにおける労働と正義の問題を、「GI (地理的表示) 認証」、「フェアトレード認証」、「グルカランド独立運動」という三つの文脈で論じている。本書タイトルのディスタクシオン (distinction) とは、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) が提起した概念であり、フランス語で「区別」を意味する。著者は、味が、生産システムとの相互構成的な関係の中に存在し、それによって消費領域の変化が生産領域の変化を誘発し、逆もまた然りであるというブルデュー (1990) の示唆をふまえ、ダージリンの労働者が果たした重要な役割を探っている。

本書は、21世紀前後の紅茶プランテーションにおけるグルカ人の女性労働者が、世界で最も高価な紅茶を生産しながら、最も低い賃金を得て、日々の生活と仕事において不公平に苦しんできたという現実に対して、上述の三つの運動を軸に探究が進められた民族誌である。それらの運動は、労働者が市場経済によりよく参加できるようにし、社会正義をもたらすと主張したが、いずれも、労働者の正義を取り戻すものにはなりえなかった。その理由は、労働者が長い植民地時代のなかで、労働者、管理者、紅茶プランテーションの景観からなる「三者間のモラル・エコノミー (tripartite moral economy)」(p.32) に根ざした独特の価値観と社会的正義感を身につけたからである。

2013年に米国で出版された本書は、米国経済人類学会 (SEA) の最優秀書籍賞を受賞した。以下では、その内容を紹介した上で、論評を加えてみたい。

序章と終章と五つの章から構成されている本書の序章「21世紀に向けてプランテーションを作り直す」では、インドの紅茶生産とプランテーション・システムを紹介しながら、ダージリンにおける正義に対する異なる見方について論じている。著者は最初に、本書を理解するために重要な二つの概念を提起する。一つは、ジュリー・グスマン (Julie Guthman 2011) が提起した「農耕の想像 (agrarian dreams)」に基づいて翻案した「第三世界の農耕の想像力 (third world agrarian imaginary)」である。著者は、世界中に蔓延している想像力、すなわち原始的な農耕の想像を第三世界の農耕の想像力と呼んでいる。ダージリンの第三世界の農耕の想像力では、茶は何世紀にもわたる植民地支配と植民地時代の機械化農業の産物ではなく、自然に育つかのように描かれる。もう一つは、労働者、管理者、紅茶プランテーションの景観が築き上げた「三者間

のモラル・エコノミー」である。三者間のモラル・エコノミーは、エドワード・パーマ・トムスン (Thompson, E. P., 1971) が提起した「モラル・エコノミー」概念に基づいている。モラル・エコノミーとは、経済的な行為や行動を支えている論理の中に人々の道徳的なもの(倫理)がある場合、そのような原理で動く経済活動や実践のことである。こうした諸概念が、ダージリン茶産地の歴史や社会正義を解釈するのに役立てられる。

第1章「ダージリン」では、ダージリンの景観の構築とそこに生産性の高いプランテーションが生み出された歴史的な変遷がたどられる。紅茶プランテーションのシステムを確立するために、植民地行政官は、ダージリンを「荒地」として分類した土で利用できるようにし、「庭園」化して耕作を正当化することが必要だった。興味深いのは、紅茶プランテーションを表す二つの表現が区別されている点である。労働者は、「カマン (kamān)」(p.57) ということばを使って、抑圧的・搾取的なプランテーションの生活と仕事の現実を示すようになった。これに対して、プランテーションの経営者、政府関係者、パイヤー、そして外部の観光業者は、「ガーデン (garden)」(p.57) ということばを使うことで、プランテーションが憩いの場であることを強調する。

第2章「プランテーション」では、ダージリンのプランテーションをおもにネパールの女性労働者の視点から眺望する。女性労働者は、自分たちと茶畑や男性プランテーション管理者とのあいだで架空の親族関係を抱くようになる様を描き出すなかで、マルチスピーシーズ (multi-species) の関係性を浮かび上がらせている。Beskyは、「女性労働者と茶の木の、母と子の親族関係が形成されているという指摘を真剣に受け取ろうとするならば、マルチスピーシーズの視点に茶プランテーションを位置づけなければならない」(p.65) と主張している。本章では、三者間のモラル・エコノミーは、非貨幣的なことばで表現されている。つまり、それは、貨幣的および市場的なことばでの公正な取引による正義の枠組みと矛盾しているのである。

第3章「所有権」では、GIと労働の問題が取り上げられる。GIとは、世界貿易機関WTOが定めた国際的な財産権制度であり、さまざまな製品を法的に保護する認証制度である。この認証制度は、世界の食糧システムにおいて一般的になってきているディスタクシオン(区別)であるが、まだ十分に研究されていない。著者は、ダージリンのGIを知的財産として、また文化的パフォーマンスや価値観の集合体として分析している。ダージリンを独特の場所と味わいとしてつくりあげるには、以下三つのプロセスが必要であるとされる。第一に、ダージリンのテロワール (terroir) を定義し、その生産に関わる「伝統的な知識」について消費者を教育することを目的とした大規模なマーケティングキャンペーンを行うことである。第二に、国際法を利用して、ダージリンの茶を生産できる地域と生態系の条件を定義することである。第三に、茶をめぐるツーリズムの導入とプランテーションを「遺産」に作り変えることである。とくに、最後のプロセスに関して、「生きた歴史」の証人として外部の観光客たちがいかにテロワールを演出するのかについての著者の記述と分析は、経験的な民族誌の強みが生かされているという点で、非常に興味深い。

第4章「公平」では、プランテーションにおけるフェアトレード制度の導入と労働者間的问题に焦点が当てられる。フェアトレードは、地域の農民や労働者が賃金の改善や融資制度を利用して起業することによって、経済的・社会的地位を向上させることができるという仮定のもとに実施されている(箕曲 2014)。著者は、主要な認証機関であるフェアトレードUSAが、農場とプランテーションを区別していないと指摘する。プランテーションは「大規模農場」とみなされ、その所有者と経営者は「農民」とみなされる。この認証制度は、プランテーションが階層的で植

民地的な産業であり、労働者が金銭だけでなく、住宅、食料、医療、学校も所有者に依存しているという事実を考慮していないと著者は批判している。重要なのは、すべての農業システムが消費者の博愛に基づく市場ベースの解決策に適合させられるわけではないことを強調している点である。また本章において、プランテーションの管理者が「まだ有効なシステム（三者間のモラル・エコノミー）があるのに、なぜ代替システム（フェアトレード）を導入するのか？」（p.133）という疑問をもっていることを指摘する。プランテーションは、いかに製品を販売しようとも、不公正と搾取の上に成り立つシステムにほかならないのだと著者は鋭く批判している。

第5章「主権」では、西ベンガルから独立しようとするグルカランド独立運動と労働者の関係性について考察している。その独立運動は、歴史的に深いルーツをもっている。前述したように、ダージリンのプランテーションは植民地時代の産物であり、現地のグルカ人は植民地時代に移住してきたネパール人たちである。彼らは、自らをユニークな社会集団とみなしており、そのアイデンティティは、植民地支配の歴史、ポストコロニアル時代におけるインドの農業労働者の階級意識の形成、およびグルカ族をインドの民族集団の一つとして確立するための社会運動（p.18）という三つのプロセスから生まれている。彼らは長いあいだ、「アイデンティティ危機」（p.139）に悩まされ、州の独立を目指していた。しかし、プランテーションと独立運動のあいだには、埋められないギャップがあった。それは、独立運動が求めた正義は、ダージリンの領土主権を指向したため、プランテーションにおける三者間のモラル・エコノミー関係性の衰退や経済的不平等に注目することはなかったのである。

終章「何もないよりは少しでもあったほうがよいのか？」では、本書を通じて著者が取り組んだダージリン茶に関わるさまざまな正義のかたちを解き明かしている。同時に、「正義の市場があることは明らかだが、その市場は正義ではない。農業の正義を市場価値にし、消費可能なものとするためには、賃金労働の時間を販売可能な製品に変換するだけでなく、市場性のあるイメージに変換することが必要である」（p.175-6）と、著者は正義に対する根源的な批判を示すことで本書を締めくくっている。

本書では、ダージリンの紅茶プランテーションに正義を導入しようとした三つの運動をたどりながら、第三世界の農耕の想像力は、プランテーションで起こった不公正に対抗するには十分だったことを示唆している。著者はまた「フードシステム研究の先駆者」（p.5）であるミンツ（Mintz, S. W.）に言及している。ミンツ S. W. (2021) は、数世紀にわたるイギリスにおける甘さの歴史を、生産、消費、権力の三つの異なる視点から考察した。その上で、砂糖プランテーション、奴隷貿易および労働者の問題を批判した。著者は、植民地時代の搾取を再生産しながら換金作物を生産するプランテーションの実態を間近に観察している。本書を通してわれわれは、植民地時代の遺産と呼ばれる紅茶プランテーションの歴史は、簡単には消し去ることなどできないことに気がつく。ダージリンと労働者との関わりは、自然よりもむしろ歴史によって形作られたものである。そこに生きている労働者の生活は、植民地時代の歴史を深く受け継いでいるのである。

著者が言いたいのは、国家的なGI、世界的なフェアトレード、地域的なグルカランド独立運動が、労働者のために「植民地時代の過去の不公正を取り消す」（p.15）ことに失敗したという点である。それどころか、これらの行動は、「第三世界の農耕の想像力」にとらわれている。もっとも重要なのは、GIであれ、フェアトレードであれ、グルカランド独立運動であれ、女性労働者は、プランテーションの現状を変えようとしているのではなく、三者間のモラル・エコノミーを取り戻したいのである。

労働者が正義に対して持つ複雑な感情は、「industryとしての茶」（p.61）から「businessとし

ての茶」(p.62)への歴史的な変遷に由来する。過去のindustryでは、管理者が労働者にfaciliti-haru(住居や医療などの福利厚生)を提供する必要があったが、現在のbusinessでは、そのような福祉施設は、根こそぎにされてしまった。faciliti-haruは、三者間のモラル・エコノミーを安定させるための重要な存在である。つまり、管理者は、労働者に必要な福利システムを提供し、労働者がプランテーションの農業環境を世話するという互酬的な関係があることを示している。

前述したように、著者は、マルチスピーシーズ民族誌/人類学の視点でネパールの女性労働者とプランテーションの景観との親族関係を記述している。著者は、ダージリンのプランテーションを「植物、動物、人間、そして非生物の生きた集合体」(p.41)にとらえようとしている。しかし、本書を通じて、プランテーションが人間以上の景観としていかに作られているのか、人間と非人間がどのように関係性を築き上げているのかを深めるに至っていない。そのため、読者は女性労働者と茶の木、土壌、気候という農業環境との関係性を十分に理解することはできない。今後、紅茶プランテーションの労働者と正義をめぐる民族誌的な労作である本書を継承しつつ、マルチスピーシーズ民族誌/人類学の新たな流れを汲み入れながら人間と茶の木、土壌、気候などの非人間がどのようにダイナミックな関係性を紡ぎ出し、世界が制作されているのかを描き出す研究のなされることが期待される。

参考文献

- Guthman, J. H. (2011). *Weighing in: Obesity, food justice, and the limits of capitalism*. University of California Press.
- Thompson, E. P. (1971). The moral economy of the English crowd in the eighteenth century. *Past and Present* 50:76-136.
- ブルデュー, P. (1990). 『ディスタクシオン 1』(石井洋二郎・訳). 藤原書店. [原著: Bourdieu, P. (1979). *La Distinction: Critique sociale du jugement*. Les Éditions de Minuit].
- 箕曲在弘 (2014). 『フェアトレードの人類学: ラオス南部 ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』. めこん.
- ミンツ S. W. (2021). 『甘さと権力: 砂糖が語る近代史』(川北稔、和田光弘・訳). ちくま学芸文庫. [原著: Mintz, S. W. (1986). *Sweetness and power: the place of sugar in modern history*. Penguin Books].